The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	コラム　男ではない男を求めて ： 宝塚歌劇と歌仔戯の人気の影に潜むもの
Author(s)	東, 園子
Citation	フェミニズム・ジェンダー研究の挑戦：オルタナティブな社会の構想. 2022, p. 144-147
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/88606
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

男ではない男を求めて
――宝塚歌劇と歌仔戯の人気の影に潜むもの――

東　　園　子

（京都産業大学現代社会学部現代社会学科准教授）

牟田和恵 編　フェミニズム・ジェンダー研究の挑戦：オルタナティブな社会の構想　コラム

ISBN 978-4-87974-779-2　C3836

男ではない男を求めて――宝塚歌劇と歌仔戯の人気の影に潜むもの――

東　園子

宝塚歌劇（以下、「宝塚」と略す）への愛が高じて、牟田ゼミで宝塚を研究して博士号まで取ってしまったリアル宝塚博士の私は、テレビで韓国の男性アイドルグループを見かけて驚いた。

「めっちゃ宝塚の男役みたいな見た目の子がおるやん！」

よく知られているように、宝塚では男性の役が女性によって演じられる。女性を中心とする宝塚ファンが、宝塚で男性を専門的に演じる男役に感じる魅力の一つに、中性的な美貌があげられる。整った顔立ちに化粧をしたK-POPの男性アイドルには、私服姿の男役を彷彿とさせるものがあった。

「こんなに男役っぽい男の人がいるなら、宝塚からK-POPに流れるファンが次々出てきて、宝塚が衰退してしまわんか……？」

中性的な美貌を持つ男性芸能人はK-POPのボーイズグループだけではない。日本のジャニーズアイドルなどもそうだし、美形の若手男性俳優らがアニメ等のキャラクターに扮する2.5次元舞台等、女性を主な対象に見目麗しい男性を売り物にした芸能が近頃盛んになっている。男性アイドルらの容貌は舞台化粧をした男役とはまた異なるものの、中性的な容姿の男性像を見せることができるのは、もはや男役の専売特許ではないだろう。

では、中性的な美貌に留まらず、男役にしか表現できないことはあるのだろうか。女性が男性を演じる演劇として、日本には宝塚の他にもOSK等の類似した舞台があり、海外でも台湾の歌仔戯（クァーヒ）・中国の越劇・（現在では廃れているが）韓国の女性国劇（ヨソン・グック）等が存在する。その中から宝塚と歌仔戯を元に、女性が男性を演じるからこそ表現できることを考えてみたい（なお、ここでの「女性」とは性自認に基づくのではなく、宝塚歌劇団の入団条件となる、出生時に身体を元に割り当てられた性別に基づく）。

まず、歌仔戯について説明しておこう。俗謡を表す「歌仔」と芝居を表す「戯」という言葉からなる歌仔戯は、京劇等と同じく歌が入る中国の古典的な演劇ジャンル「戯曲」の一種と位置づけられ、「台湾オペラ」とも呼ばれる。1890年代から1910年代のあたりに台湾で庶民の娯楽として始まり、かつては映画やテレビでも人気を博した。祭りの際に公演が行われることもあり、台湾では誰もが知る存在のようだ。私も台湾で複数の劇団の歌仔戯を観劇したが、格式ある劇場での洗練された公演もあるものの、庶民的な劇場や野外の仮設舞台での公演も多く、後者は日本の大衆演劇に近いものを感じた。主に古い時代の物語を上演する点、娯楽色の強い大衆的な雰囲気がある点、衣装にラインストーンが使われるなど華やかさが重視される傾向がある点、しばしば家族ぐるみで劇団を作り旅公演を行っている点などが似ている。だが、日本の大衆演劇では男性が女性を演じる女形が人気なのに対して、歌仔戯では「小生（シャオシェン、中国伝統劇で若い男性の役を指す）」と呼ばれる、男性の役を演じる女性俳優が主役を務めることが多いのが、大衆演劇とは異なり宝塚に通じる点だ。歌仔戯の演目は男女の恋愛物語が中心で、ファンには女性が多いというのも宝塚と共通する。ただし、すべての役を女性が演じる宝塚と違って、歌仔戯では男性の役のうち、若くてハンサムなヒーロータイプの役は女性が、悪役・道化役・老け役などは男性が演じることが多いようだ。

台湾の人は女性が男性に扮する演劇に慣れ親しんでいることもあってか、宝塚が2013年に初めて台湾で公演を行った際には、チケットの売れ行きもよく、アイドルのコンサートのような歓声があがるほどの盛り

上がりを見せた。その成功を受けて 2015 年と 2018 年にも台湾公演が実施され、後者では台湾の中心地・台北に加えて南部最大の都市・高雄でも上演された。宝塚は台湾で着実にファンを増やし、2015 年から公演の映像を生中継するライブビューイングが台湾の映画館でも上映されるようになった（海外では 1998 年に宝塚が公演を行った香港でも上映されることがある）。また、台湾の動画配信サービスにも宝塚の舞台映像を扱うものがあり、一定数のファンがいることがうかがえる。宝塚の 3 回の台湾公演を現地で観察したところ、客席には日本から駆けつけたと思しきファンや現地在住らしい日本人家族も見られたが、多数を占めるのはやはり台湾の人たちだった。観客の中での男性の割合は、1 割程度しかいない日本よりは多いように見受けられたが、楽屋口で劇場に出入りする出演者を待つような熱心なファンとなると、20 ～ 40 代程度の女性が中心だった。

それでは、台湾の人たち、特に歌仔戯をよく知る人の目に、宝塚の男役はどのように映ったのだろうか。私は 2013 年と 2015 年に、宝塚の公演や舞台映像を鑑賞した経験のある、歌仔戯やそれを取り入れた劇団で男性役を演じる女性俳優（小生）・スタッフ・ファンの 6 名の女性にインタビュー調査を行った。彼女たち歌仔戯関係者に歌仔戯の小生と宝塚の男役を比較してもらったところ、小生は主に中国演劇の伝統的な演技の型に基づいているのに対し、男役は西洋的な衣装やダンスを取り入れ、より日常的なしぐさをするという相違点があげられた。とはいえ、いずれの人も男役と小生に本質的な違いはないととらえていた。小生の人たち自身、近年少しずつ増えてきた近現代を舞台にした作品に出演する際、宝塚の男役のしぐさなどを参考にすることがあるという。このことも宝塚の男役と歌仔戯の小生の近さを示唆している。

では、小生にしろ男役にしろ、女性が男性を演じることでどのような効果が生まれるのだろうか。調査対象者の回答を分類すると、大きく 4 つに分けられた。

一点目として、優雅で洗練された中性的な見た目の美しさがある。

二点目として、虚構性がある。男役や小生は、現実の男性とは距離がある虚構の存在を演じられることに演劇的な意味があるという。

三点目として、女性が理想とする男性像を表現できる。例えば、女性に優しく愛情深い、愛情表現が細やか、国や女性に対して責任感が強いといった男性像を体現できるのが魅力だという。

四点目として、女性にとって様々な面で安心できるという。例えば、小生は実際には女性なので、夫のいる女性がどれほど小生に夢中になっても浮気にはならないという意見があった。これは異性愛を前提とした見方だが、ただ、この点をあげた人は、女性にとって小生には安心感がある理由はそれだけではないが、うまく言葉にできないと語っていた。また、女性が演じる男性は、女性に激しい思いを抱いても女性を襲うようなことはないので安心できるという意見もあった。もちろん、宝塚や歌仔戯の上演作品の中に男性が女性に無理やり性行為をする筋書きを入れることはできるが（少なくとも宝塚では、そのような作品が数は少ないが存在する）、そうした場合でも、男役・小生は「男の体」と見なされる身体を持っていないので、性的な面で脅威を感じずに済むということだろう。歌仔戯で男性俳優が男性を演じる場合、観客は小生が演じるとき以上にラブシーンにリアリティを感じているように思うと語ってくれた人もいたが、それも男性俳優の身体が性的な場面で生々しさをもたらすことを示唆している。

美しさや優雅さ、優しさ、愛情深さなど、一般的に女性的とされる性質（以下、「女性性」）を持つ男性は「女々しい」「なよなよしている」などと否定的に見られることがある。また、2003 年に自民党の太田誠一議員が「集団レイプをする人は、まだ元気があるからいい。まだ正常に近いんじゃないか」と発言したように、女性をおもんばかって性的な行動を控える男性は「男としておかしい」「意気地なし」などと言われることもある。それらの見方は、一般的に男性的とされる性質（以下、「男性性」）を女性性よりも優れたものと見

なし、男性を中心に物事を考える、男性優位的な価値観の表れといえるだろう。その中で、否定的にとらえられやすい女性的／非男性的な性質を持つ男性像を肯定的に表現できるのが、男役・小生の特徴であり魅力の一つといえるのではないだろうか。

もっとも、女性性のある男性は女性にしか演じられないとはいえない。冒頭で触れたように、中性的な容姿の男性芸能人は今や多数存在する。また、現代では細やかな愛情表現や優しさなどを持つ男性を「男らしくない」と否定する見方は和らいできており、そうした女性性のある男性像が男性によって肯定的に表現されることが増えていくかもしれない。

だが、男性身体を持たず、「本物」の男性ではないという虚構性のある男性像を体現できるのは、女性が男性を演じる男役や小生ならではだろう。その虚構性ゆえに男役や小生に苦手意識や物足りなさを感じる人もいるだろうが、ファンにとってはそこが魅力にもなる。女性だからこそ女性が理想とする男性像を演じられるという歌仔戯関係者と同様の意見は、私が宝塚ファンに対してインタビューを行った際にも聞かれた。そのような語りの背後には、男性には女性が望む男性像が分からない、それを表現するのは不可能だという考えがあると推測される。よく宝塚は女性が理想とする男性を描いているといわれるが、「女が男役を見る時の目線を支えているのは、『男への理想』ではなく、『男への絶望』である」（荷宮 1995:132）、「〔宝塚の舞台に〕登場する人物は、観客の『現実にいたらいいな』という願望と『どうせ現実にはいないよね』という諦めとを具現化した非現実の存在であることが絶対条件」（松本 2009:24）といった宝塚ファンの見方は、歌仔戯の小生についてもあてはまるかもしれない。現実の男性とは切断された形で女性たちが望む男性像を提示できるのは、「本物」の男ではない存在が男を演じる男役や小生だからこそ可能だといえるだろう。

そのような男役や小生は男性性を組み替えてもいる。先の、女性が男性を演じる効果の四点目に関連して、物事に対しては積極的だけど、性的な侵略性がないのがいいという意見があった。一般的に、男性性には女性を性的に征服し支配することも含まれる。だが、男役や小生が演じる男性像は、能動性や行動力といった男性性から、女性にとって脅威になる性的な征服性を引き剥がしている。宝塚は、女性を専門的に演じる娘役よりも人気が高い男役を中心に舞台が構成され、既存の男性性・女性性を男女の演じ分けに利用しているため、ステレオタイプなジェンダー像を表現するものと見なされがちだ。だが、宝塚では一般的な男性性・女性性から女性たちが不快に思いやすい要素が取り除かれ再構築されている。男役・娘役が表現する男女像は、規範的な男女像と完全に同一ではない。宝塚の男役のみならず歌仔戯の小生も、男性性から多くの女性たちが嫌悪する側面を削ぎ落とした男性像を体現できるからこそ、女性ファンの支持を得ているのだろう。そして、そのような自分たちが求める男性像を理解し表現できる男役や小生に、女性ファンが仲間意識を感じていっそう愛着を深めることもあるだろう。

舞台で華やかに装う宝塚の男役や歌仔戯の小生の輝きは、現実の男性たちに対する女性たちの絶望や諦めという影によって、より強い光を放つ。宝塚ファンには様々な性的指向の人がおり、また異性愛者の女性だろうとファンにとって男役や小生は現実の男性の代理として（のみ）あるのではないため、その魅力は常に現実の男性との対比で生まれるわけでは決してない。ただ、現実の男性との差異が、女性たちが男役や小生に惹きつけられる理由の一部になることもあるだろう。男性芸能人がどれほど女性性のある男性像を表現できるようになろうと、現実の男性に絶望し諦念を抱く女性がいる限り、男役や小生は女性たちから愛され続けるに違いない。逆にいえば、現実の男性が女性を一切幻滅させなくなれば、男役や小生の人気は落ちるのかもしれない。だが、現実は人々が夢見るようには都合よくできていないので、そのような日は来ないだろう。女性たちの夢想と幻想がめいっぱい詰まった男役や小生を、現実の男性が超えられるわけがない。宝塚と歌仔戯は、永久に不滅である（たぶん）。

※本稿の元になった研究はJSPS科研費（26870349）の助成を受けている。調査にご協力いただいた皆様に、改めて感謝します。

参考文献

張懐文，2015,「台湾文化としての歌仔戯をめぐる研究――見せる／見られる女性の身体と演技を中心として」大阪大学大学院文学研究科2015年度博士論文.

荷宮和子，1995,『宝塚の香気――オスカルからポスト・フェミニズムへ』廣済堂出版.

松本理沙，2009,「夢をありがとう」榊原和子編著『宝塚イズム7』青弓社，21-25.

あずま そのこ　1978年生まれ　京都産業大学現代社会学部現代社会学科准教授

主な著書

『宝塚・やおい、愛の読み替え――女性とポピュラーカルチャーの社会学』新曜社、*Shōjo Across Media: Exploring "Girl" Practices in Contemporary Japan* (co-author) Palgrave Macmillan、『BLの教科書』（共著）有斐閣、『ガールズ・メディア・スタディーズ』（共著）北樹出版